

生徒が主体的に取り組める音楽科授業

－ICTを活用した授業実践を通して－

学籍番号 229331

氏名 足立 明音

主指導教員 澤田 和夫

副指導教員 平井 裕也

1. 研究の動機と目的

研究の動機は、筆者がこれまで経験した音楽科の授業で、生徒の音楽経験の有無によって授業に対する姿勢に差があることに疑問を感じていたからである。そこで、個人的な習い事や部活動、地域活動などの経験がない生徒や、音楽に対して苦手意識がある生徒も意欲をもって取り組むことができる授業がしたいと考えた。そのためには、まず生徒が音楽の授業に対して主体的に取り組めるような手立てが必要だと考えた。

本研究の目的は、「生徒が主体的に取り組める音楽科授業」について、ICTを活用した授業実践を通して明らかにし、生徒が活動に対して主体的に取り組める手立てについて導き出すことである。

2. 研究の方法

今回は、学校実習における授業実践の授業分析を行う。

研究の方法として、まず「主体的」という言葉について、一般的な辞書や教育学関係の辞書での意味を調べる。次に、学習指導要領における「主体的」という言葉についてまとめ、定義する。そして、基本学校実習Ⅱ～発展課題実習Ⅱの授業分析を行い、ICTを活用した授業実践での「生徒が活動に対して主体的に取り組める手立て」を明らかにする。最後に、これらをもとに結論と考察、今後の課題について述べる。

3. 研究の概要

3. 1 基本学校実習Ⅱ（1年目後期）における取り組み

基本学校実習Ⅱでは、鑑賞《六段の調》の授業実践を行った。実践の結果、パソコンを用いた調べ学習でのグループワークは、約9割の生徒が「意欲的に取り組めた」、箏

の奏法についての動画学習は、約8割の生徒が「日本伝統音楽への関心は高まった」と回答していた。このことから、ほぼ全員が活動に対して真摯に取り組むことができていたといえる。

3. 2 発展課題実習Ⅰ（2年目前期）における取り組み

基本学校実習Ⅱの実践を踏まえ、「生徒が目的を意識できるグループワークの設定」「生徒の思考の経過が分かるワークシートづくり」に留意し、歌唱《浜辺の歌》の授業実践を行った。実践の結果、パワーポイントを用いた発声練習は約9割の生徒が効果的と捉えられる回答をした。その一方で、ミュージクスコアを用いた歌唱練習やグループ練習を録画する活動は活用方法が効果的と言えなかった。このことから、ICTを活用する際には、生徒の実態を十分に踏まえた上で、活用するタイミングを適切に設定する必要があると考えられる。

3. 3 発展課題実習Ⅱ（2年目後期）における取り組み

発展課題実習Ⅰの実践を踏まえ、「発声練習で得た声の出し方や体の使い方を歌唱にも活かすことができるような手立てを行うこと」「ICTを活用する際に、生徒の実態を十分に踏まえた上で、活用するタイミングを適切に設定すること」に留意し、歌唱《サンタ ルチア》の授業実践を行った。実践の結果、パワーポイントを用いた発声練習やコラボノートを用いた活動は効果的であった。その一方で想定以上にコラボノートの作成に時間を要したことから、ICTを活用する活動の在り方をさらに検討していくことが必要であると考えられる。

4. 結論

授業実践を行った結果、導き出した「生徒が活動に対して主体的に取り組める手立て」は、「①目的を意識したグループワーク」、「②視覚的媒体を使った活動の設定」、「③新たな気づきを得られるグループワーク」であった。

5. 今後の課題

1点目は、生徒の学びを深めるために、ICTを効果的に活用するという視点をもつことである。生徒の学習の流れや実態を踏まえ、必要な手立てや効果的なICTの使い方についてさらに検討していきたい。

2点目は、生徒たちが意見を交流し、共有して考えた過程を残すことである。ワークシートなどを用いて、生徒が自身の考えや気づき、学びを振り返り、次の学習への見通しを持てるような手立てを考えていきたい。